オルガフロントライン

神代リナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄血のオルフェンズの登場人物が何故か２０６２年のドルフロの戦場に異世界転生する話しです。

目次

地獄への異世界転生 ―― 1
バエル教の始まり ―― 5
指揮官は辛いよ ―― 8
自己紹介は死なないと出来ない男 ―― 10
グレイズと愉快な仲間たち（？） ―― 13
毒を以て毒を制す ―― 16

地獄への異世界転生

某アニメのとある話にて

キボーノハナ

「だからよ…止まるんじゃねぇぞ」

そうか…俺は死んじまったのか。いや…こんな所で止まる訳には行かないんだ！俺は…その先に…

「オルガ、オルガ！」

この声は…ミカじゃねぇか。

「あぁ、ミカか。大丈夫だ」

「良かった…」

三日月オーガス（バルバトスルプスレクスもセット）とオルガイツカは今、見知らぬ土地に居た。

「どこなんだよここは…」

「俺にも分からない」

「とりあえず先に進むか」

「そうだね、オルガ」

オルガとミカは歩き始めた。

「そういや、バルバトスも勝手に歩いてるじゃねぇか。大丈夫なのか？」

「大丈夫でしょ。多分」

「多分ってお前なぁ」

何故かパイロットが搭乗しなくても移動するようになったバルバトスが不安だが…とりあえず、この土地の人を探す事にしたが
「人が一人もいねぇな」
「ギャラルホルンのＭＳも居ない…」
そう、鉄華団は今ギャラルホルンと争っていたのに当のギャラルホルンのＭＳが居ないことに不信感を覚える２人であった。
「オルガ、伏せて！」
「どうしたんだミカ？」
オルガが伏せた次の瞬間、１回の銃声がして、さっきまでオルガが立っていた場所に銃弾が着弾した。
「なんだよ…結構危ないじゃねぇか。サンキュウなミカ」
「オルガが無事なら良かった…次は何をすれば良い」
「そうだな…俺たちの邪魔をする奴は…ぶっ潰す」
「分かった」
ミカはバルバトスに近づいて、コックピットに入る。
「ガンダムバルバトスルプスレクス、三日月オーガス、出るよ」
「やっちまえ、ミカー！」
三日月はまず、敵を探す。さっきの狙撃の時の銃声から大体の位置は分かっている。
「オルガ、敵を見つけた」
「どんなだ？」
「女の人だ。着ている服とか持ってる銃も見たことない」
「もしやここは火星じゃ無いのかも知れないな…まあ良い、とりあえず…潰せ」
まあ、ＭＳからしたら人間なんてアリみたいなものだ。
バルバトスが手に持っている大型メイスをスナイパーのいる場所に叩きつけるとスナイパーはもはや跡形も無く粉砕していた。
「オルガ、少し先にさっきのスナイパーの仲間っぽい奴らとそいつらの敵が戦ってるけど…」
「敵の敵は味方…ここはさっきの奴の味方をやっちまおう。頼んだぜ、遊撃隊長」

「分かったよ、行くよ…バルバトス」.
バルバトスはリアクターを全開にして、戦闘地域に飛んで行った。

「ここまでよ、Ｍ４Ａ１」
「くっ…鉄血のクズめ」
Ｍ４Ａ１率いるＡＲ小隊は鉄血の代理人率いる部隊に対して劣勢だった。
「Ｍ４、これからどうする?退路も絶たれたわよ」
ＡＲ小隊のメンバーの一人、ＡＲ１５が敵を撃ち殺しながらＭ４に聞く。
「あと少しで指揮官が指揮する援軍が来ますそれまで持ちこたえられれば…」
「すまんＭ４、私の方は弾薬が持ちそうにない。一度補給に戻る」
「Ｍ１６姉さん…分かりました。後退してください」
Ｍ１６が後退した事により、防衛ラインに穴が空いた、もちろん鉄血の部隊が見逃すはずも無い。代理人自らを先頭にして、大量の鉄血兵が防衛ラインを超えてくる。
「これは…私の判断ミスね」
「違う、Ｍ４。これはお前のせいじゃない」
「そうだよ、Ｍ４。今回は運が悪かっただけだよ」
Ｍ１６とＭ４ＳＯＰＭＯＤⅡがＭ４を慰める。
「運が悪い…か」
「違う、運が悪かったのでも無い。私が鉄血をもっと早く見つけられてれば…Ｍ４、これは私の責任よ」
「ＡＲ１５…貴方のせいじゃ無い。みんな、今から防衛ラインをたて

なおしましょ」
「了解」
仲間たちの気合いの入った、心強い返事が返ってきたが…
「頼もしい仲間達ですね。でも、さようなら」
代理人がＭ４の前に立っていた。
「こんな所で…私は…」
「Ｍ４」
Ｍ４はそっと目を閉じた。が…突然、大地が大きく揺れた。
「えっ…一体何が…」
目の前には何やら大きなもの（バルバトスのテイルブレード）に押し潰された代理人が居た。そして、その大きなものにはケーブルが付いていてそのケーブルを辿った先には…
大きなロボットが立っていた。
「そこのお姉さん、大丈夫？」
そのロボットに乗っている人と思わせた人から無線が入った。これが鉄華団とグリフィンとの出会いだった。

バエル教の始まり

「へぇ…これが異世界転生ってヤツか」
　ミカはそこら辺から拾ってきた軍用レーションを頬張りながら呟く。
　ミカがバルバトスのテイルブレードで代理人を潰した後、そのままバルバトスを使って鉄血の部隊を蹴散らし、見事にＡＲ小隊を救出。その後、オルガ団長も合流し、Ｍ４達にここはどこかと聞いてみると２０６２年の地球と返答されたもんだからおどろきである。さらに崩壊液やら人形のことも教えられて、オルガとミカの頭はパンク寸前である。
「まったく…流石にこの展開は想定外だぞ…さらに人型の全自動アンドロイドに崩壊液か。俺たちからしたらとんだオーバーテクノロジーだぜ、まったく…」
「オルガ、全自動の機械なら火星に…」
「なんだよ…ＭＡじゃねぇか」
　まあ確かにハシュマル達モビルアーマーも全自動の機械兵器だし、人類に敵対してたけど…あれ？サイズと感情を除いたら鉄血と変わらないんじゃ…
「私たちからしたらそっちの世界の方がオーバーテクノロジーだと思うけど…」
　ＡＲ１５が突っ込む。エイハブウェーブとか確かによく分からんしな。でも、人形が配給食べてるのも中々…
「で、オルガ。これからどうするの？」
「そうだな…とりあえずどこかのＰＭＣとでも協力したいところだが」
「あのー、お二人ともちょっと良いですか」
「Ｍ４か。どうしたんだ」
「私たちを助けてくれたお礼に…私たちの基地に案内しましょうか？」
「…有難い。頼む」

道は開けた。後は進むだけだ。

～少年、少女移動中～

「ここが私たちの基地（Ｓ―０９地区の基地）だよ～」
　ＳＯＰＭＯＤが言う。
「やけに上機嫌だな」
「だってやっと帰って来れたんだよ…疲れた」
「さて、私はジャックダニエルを…」
「Ｍ１６姉さん…」
　Ｍ１６達酒飲みの酒代がこの基地の出費１／３程度を占めてるとかなんとか。
「では、私たちは指揮官を呼んで来ますのでちょっと待ってて下さい」
「…この基地、鉄華団の基地より立派だ」
「そりゃ俺たちとは違ってグリフィンは大企業らしいからな…あれ？あそこにいる奴…マクギリスじゃねぇか」
　オルガの目線の先には金髪の男性…マクギリス・ファリドが居た。
「チョコの人、こんな所で何してるの？」
「やあ、三日月オーガスにオルガ団長。まさかこんな所で会うとはね」
　マクギリスはオルガ達に近づいてきた。
「なんでお前がグリフィンに？」
「実は気がついたらこの基地の目の前に居てね。そしたらここの基地の指揮官に拾われたんだ」
「へぇ…バエルは？」
「あぁ、バエルならあそこに」

マクギリスの指差す方向を見るとガンダムバエルが立っていた。
バエルの近くには何やらバエルに興味があると思われる人形が数名いた。
「なんだよ…結構人気じゃねぇか」
「私は決めたんだ…この世界でバエル教を築くと…これこそアグニカカイエルの意思を引き継いだ私の役目だ」
「あんた頭までバエルじゃねぇか」
「ふっ…私にとっては褒め言葉だ。鉄華団諸君、こちらの世界でもよろしく頼む」
「あぁよろしく頼むぜ」
オルガとマクギリスは握手をする。果たしてこの世界で彼らはどこにたどり着くのか…
「オルガ、Ｍ４が戻って来たよ」
「という事はその隣にいる白髪の女性がここの指揮官か」
「あぁ、彼女こそがここの指揮官だ」

指揮官は辛いよ

「あんたがここの指揮官か？邪魔してるぜ」
　オルガはＭ４が連れてきた指揮官に話しかける。
「は、はい。一応ここの指揮官をやってます、神崎莉奈（かんざきりな）と申します」
「俺は…鉄華団団長、オルガイツカだぞ」
「指揮官、一応なんて付けないでください。あなたは立派な指揮官なんですから」
　Ｍ４が神崎の自己紹介の一応の部分を指摘する。
「一応って事は何かあるのか？」
　オルガが指摘したのはもっともだ。一応指揮官などと言われると少し不安になる。
「いや、私はちゃんとグリフィンの試験を通過した正規の指揮官なんですけど…着任して間もないので少し自信が持てなくて」
「なんだそういうことか」
　着任して間もないのなら自信が持てないのも仕方あるまい。これは時間が解決してくれる…はずだ。
「それでですね…私が着任したばかりって言ったじゃないですか。そのせいでこの基地は人形の数が少なくて…戦力的に不安なんですよね」
「それは大変だな」
「だから…貴方達を雇いたいんですよね」
　…なるほど。てかこの世界ならＭＳは何師団分の戦力になるだろうと考えるオルガだった。
「分かった鉄華団はあんたの側に乗ってやる」
　指揮官とオルガは握手を交わした。
「オルガ団長、ありがとうございます」
　指揮官は嬉しそうだ。
「オルガ、それで良いの？」
　ミカがオルガに尋ねる。

「あぁ、グリフィンはこの世界ではもっとも強いＰＭＣだ。そいつらと手を組めるなんて願ってもねぇ事だ」
「そっか。オルガが決めたことなら良いよ」
　ミカはまた軍用レーションを食べ始める。
「美味いのか、それ？」
「うん」
　なんかあんま美味そうには見えないが…
　と、さっきバエルが置いてあったところを見ると
「マクギリスさん、そのロボットちゃんと動くんですか？」
　一人の人形がマクギリスにこんな事を聞いてしまった。
　あ、なんか嫌な予感が
「あぁ、ならば見せてやろう」
　マクギリスはバエルのコックピットに乗る。
「ちょっと待ってくれ！」
　マクギリスはオルガの制止を聞かずにバエルを起動させた。
「えっ？オルガさん、別に動かすくらいなら構いませんよ…」
　指揮官が言う。そう、ここの人達は知らない。こんなところでエイハブリアクターを使うとどうなるかを。
「いや、ＭＳにはエイハブリアクターってのが付いててだな…こいつを起動させると」
「させると？」
「３００年の眠りから今バエルは蘇った！」
　マクギリスはそう叫ぶとバエルは空へと飛び立った。
「チョコの人、それはダメだ！」
　ミカが最後の制止をするがもはや意味をなさなかった。
「…エイハブリアクターを起動させると通信システムが使えなくなる」
「…あっ（察し」
　指揮官は全てを察した。
　そのあと、マクギリスはめちゃくちゃ団長に殴られた。

自己紹介は死なないと出来ない男

「オルガさん、三日月さん」
　神崎指揮官が走ってきた。一体俺たちに何の用だ？
「どーしたんだ？」
「何かあったの？」
「一応、お二人にはこの基地の人形に自己紹介をしていただきたいので司令室まで来てください」
「あぁ、分かってる」

　司令室
「スオミ　ＫＰ／／３１です。これからよろしくお願いします」
「正式名称、一〇〇式機関短銃です」
「Ｍ４Ａ１です。改めてよろしくお願いします」
「ＡＲ１５よ、これからよろしく」
「Ｍ１６Ａ１だ、よろしく頼む」
「Ｍ４ＳＯＰＭＯＤⅡだよ。よろしくね～」
　何だよ…みんな女の子じゃねぇか。にしても人形っていうのは本当に人間と見分けがつかないな。
「そして私が後方幕僚のカリーナです」
「で、私が指揮官の神崎　莉奈です。改めてよろしくね」
「私はマクギリス　ファリドだ。皆のもの、バエルの元に集え」
「こいつはただのバエルバカだ。あまり気にしない方がいい…ミカ、頼んだぜ」
「分かったよ」

そう言うとミカは拳銃を取り出し…
パン、パン、パン
「俺は…鉄華団団長、オルガイツカだぞ」
キボーノハナ
「だからよ…止まるんじゃねぇぞ」
「三日月オーガス…です」
超冷静に自己紹介をする2人だった。
「ちょっと今、オルガさん死んでなかった？」
「あれ、実弾ですよね…」
「なんであんなに冷静にフレンドリーファイヤをしてるのさ？」
人形達からそんな声が聞こえてきたが…
「こんくらいなんてことはねぇ」
撃たれたオルガはピンピンしてた。さっきまで流れていた血はどこに消えたのだろうか…人形達は考えるのをやめた。
「そしてあれが私の愛機、ガンダムバエルだ。かつてアグニカカイエルが乗っていた、伝説の機体だ」
「バエルだ！」
「アグニカカイエルの魂！」
「そうだ、ギャラルホルンの正義は」
「我々にあるぅ！」
ＡＲ小隊がダメみたいだな（諦め
「ねえ一〇〇式ちゃん、ギャラルホルンってなんだか分かる？」
「分からないです…」
「なら俺が教えてやるよ…まず俺たちの世界では３００年前に厄祭戦っていうのがあってだな」
俺は一〇〇式とスオミに俺たちの世界の技術や歴史を話し始めた。
「じゃ神崎指揮官、俺はバルバトスの整備をしてくる」
「私もバエルの整備をするとしよう、失礼する、神崎指揮官」
ミカとマクギリスは自身の愛機の整備をしに行った。その後、いつのまにか神崎指揮官やらカリーナやらも俺の話しを聞き始めた。

数時間後…

「これが俺が知りうる俺たちの世界の情報だ」

「ナノラミネートアーマーって凄いですね、これなら正規軍も怖くないですね」

一〇〇式が言った。

「そうだな、恐らくこの世界にある兵器はバルバトスやバエルに当たってもかすり傷一つ付かないはずだ」

しかし、オルガ達は知らなかった…ＰＤ世界からまだまだ転生してきた物がいることを

グレイズと愉快な仲間たち（？）

オルガ達が　Ｓ―０９地区基地に入ってから数週間がたった。グリフィンはガンダムを使用することで鉄血の人形を一方的に蹴散らしていった…

「こちらＭ４、敵装甲部隊を確認。三日月さん、援護をお願いします」

人形部隊の隊長から援護の要請が来た。

「了解。三日月オーガス、ガンダムバルバトスルプスレクス、出るよ」

バルバトスが敵装甲部隊に急速接近し、装甲部隊にメイスを叩きつける。ほとんどの装甲人形はイージスだろうがマンティコアだろうがニーマムだろうがその圧倒的質量によってスクラップと化す。

いくつかのマンティコアが生き延びバルバトスに攻撃するがその装甲には傷１つ付かない。

「お前…邪魔だよ」

ミカはそう言うとバルバトスのテイルブレードで生き残りを叩き潰す。

「指揮官、オルガ、終わったよ。次はどうすれば良い？」

ミカは無線機で司令部に居る神崎指揮官と俺に問いかける。

「三日月さん、これで任務は終わりです。人形達と一緒に帰還して下さい」

神崎指揮官は撤退命令を出すが…

「いや、待ってくれ神崎指揮官」

「どうしたんですか、オルガさん？」

「こいつを見てくれ」

俺はレーダーを指差す。

「これは…」

俺の指差した所には１つの大型の反応があった。そう、大体モビルスーツくらいの…

「間違い無い。これはＭＳの反応だ」

「でも、鉄血にＭＳを作る技術なんて…」

「恐らく、俺たちみたいに転生してきた機体を無人機にでも改造した

んだろう。鉄血が有人機を使うはずが無いからな…ミカ、やれるか？」
「少し距離が遠いかな」
　バルバトスが今居る位置からそのＭＳを攻撃するなら時間がかかってしまう。その間にそのＭＳが市街地にでも侵入したら大惨事だ。どうしたものかと俺が考えていると
「なら、私に任せてもらおうか」
「マクギリスか…すまない、頼む」
　マクギリスが今居る位置からならすぐにＭＳを攻撃出来る。
「よろしくお願いします、マクギリスさん」
「了解した、オルガ団長に指揮官」
　バエルは全速力で例の反応があった地点へと急行した…

　とある鉄血工事の兵器保管庫にて
「アーキテクト、どうやら例の兵器が敵ガンダムと交戦状態に入ったらしい…あんな得体の知れない物が本当に役に立つのか？」
「安心してゲーガー、グレイズは従来の量産型よりは役に立つから…あとはこれさえ無人化出来ればなぁ」
　そう言ってアーキテクトは目の前に立つＭＳを見る。
「これがグリフィンの奴らが使っているガンダムフレームってヤツか…」
「この子の名前は一緒に落ちてたタブレット端末によると…ガンダム・キマリスヴィダールって言う名前らしいけど。やっぱ本来は人が乗るべきものだからね」
「人形を乗れるようにすれば良いんじゃないか？」
「…あ、その手があった。ちょっと試してみる」
　アーキテクトはゲーガーの案を試すためにキマリスをいじりだし

た。

毒を以て毒を制す

「…なるほど大型の正体はやはり鉄血に改造されたＭＳか。機種はグレイズ…鉄血の奴らに見せてやろう、純粋な力のみが成立させる真の世界を」

バエルは2本のバエルソードをホルダーから引き抜き、グレイズに突撃した。グレイズはバエルを迎撃しようとバトルアックスを構えるが…

「そこら辺のパイロットよりは良い反応速度だ。流石鉄血のＡＩだ…だが、私を仕留めるには遅い」

グレイズの後ろに移動していたバエルにバエルソードでコックピットを貫かれた。

「マクギリス、終わったか？」

「あぁ、終わったよ」

「では、司令部に帰投してください」

「了解した」

司令部

「今回、あまり役に立てなかったなぁ」

「そんなことは無い。ミカはよくやってくれたよ」

ＭＳとの戦闘に参加出来ずに落ち込んでいるミカを俺は励ましてやる。

「そうですよ。三日月さんが居なかったらマンティコアの処理にもっと時間がかかってたでしょうし、あの子達も傷ついてたはずです」

指揮官が見ている方を見ると人形たちが笑顔で話していた。

「そっか」

「オルガ団長に指揮官、これが今回現れた鉄血のＭＳだ」
　マクギリスが鹵獲してきた鉄血のＭＳの写真を見せる。コックピットには人は乗っていなかった…恐らく自動で動くのだろう。
「…こいつは早めに鉄血の野郎とケリをつけないとまずいことになるな」
「このまま、鉄血がＭＳを量産し始めたらＧ＆Ｋは多大な損害を受けることになりますね…それだけは避けたいです」
　神崎指揮官の言う通りだ。
「指揮官に団長さん、鉄血がこの基地に来襲しています！」
　一〇〇式が報告してきた。かなり焦っているようだ。
「そんな…敵は人形？それとも…」
「ＭＳです！数はおよそ１０機です」
　嫌な予感が的中したな…このままだとストレスで希望の花を咲かせちまいそうだ。
「ミカ、やってくれるな？」
「分かった」
　ミカはバルバトスのコックピットに乗るとバルバトスのツインアイが緑色に光った。
「ガンダムバルバトスルプスレクス、三日月オーガス、出撃するよ」
　ミカはバルバトスの出力を全開にして敵の元へ行った。
「今回は行かないのか、マクギリス？」
「彼は一人の方がやりやすいだろう」

「ミカ、聞こえるか？」
　無線からオルガの声が聞こえた。
「うん、大丈夫」
「後、３分くらいしたら敵のＭＳが見えてくるはずだ。そしたらそいつらをなるべくＳ―０９地区基地より遠くで全部片付けてくれ」
「分かった」
　３分くらいすると敵影が見えてきた。
　１０機のＭＳが密集している…先頭にいたＭＳに対して２００ｍｍ砲を２発撃ち込む。するとそのＭＳはその場に倒れた。
「行くよ…バルバトス」